

カン・ノザキについて

ジャン＝フィリップ・トゥーサン

いまから 30 年以上前、パリのレピュブリック広場、ヴォルテール大通りの角にあるカフェで、ぼくはカン・ノザキに初めて会った。

カフェがまだあるのかどうかはわからない。もう長いあいだその界限に行ったことはない。当時、それはまさに物質的に空間の一部をなす場所だった。入口のガラス扉、木のベンチ、椅子、丸テーブル、煙草のけむりの立ち込めた空気、がやがやいう音、だがその場所はもう思い出の中にしか存在しない。なぜならぼくらの過去の場所は、空間の物質的世界に属しているのではなく、時間の構成要素になっているのであり、もっぱら記憶、回想、エクリチュールによって自らの内によみがえらせることができるだけなのだから。というわけで、そのカフェで 1992 年の 1 月か 2 月のある日、カン・ノザキと初めて会った。ぼくは映画『ラ・セヴィヤーヌ』[日本公開時の題名は『カメラ』]の撮影を準備しているところで、カン・ノザキはパリに滞在中だった。彼がフィルム・デ・トゥルネルに電話してきて、オフィスのそばにあるカフェで会うことになったのだ。その最初の出会いについてはほとんど何も覚えていない。覚えているのはせいぜい、店内の席に坐ったこと、目の前の大きな窓ガラスがレピュブリック広場の遊歩道に面していたことくらいである。向かいの席のカン・ノザキが、白いタートルネックのセーターに、体にフィットした細身の洒落た黒いジャケットを着ていたのが思い出される。以後、彼がそういうジャケットを着ているのを東京で何度も見るようになった。あなたの本は日本でよく売れていますと彼が説明してくれた。小説『カメラ』の翻訳が出たばかりだった。売り上げはだいたい何部くらいなのか、教えてもらえるだろうかと尋ねた。そう、『カメラ』はもう 5 万部売れていますと彼が言った。

「5 千ですね」数字を言い間違えたのだろうと思って、ぼくはすぐに訂正した（5 万部ではなく、5 千部でしょう）。

「いえいえ、5 万部、5 万部です」

ぼくはつばを飲み込んだ。

5 万部？

いや、まだ最初ですから、とカン・ノザキは謝らんばかりの調子であわてて言い足した。本は出たばかりなので。

この日ぼくには、自分の本が日本では何か特別な迎えられ方をしているらしいとわかったのである。

数日後 —— カンのその滞在中だったか、あるいは翌年、別のときだったか、もうよくわからないが、いずれにせよ、ぼくらの友情が始まったころのこと —— 、マドレーヌとぼくは、カン・ノザキをサン＝セバスチャン通りの自宅での夕食に招待した。カンは妻のマキコと一緒にやってきた。ポトフと上等の赤ワインを用意したことはとてもよく覚えている（記憶はワインとともによみがえる）。息子のジャンはそこそこ 3 歳か 4 歳で、夕食の席に加わった。首のまわりによだれかけをし、ミニユイ社社長ジェローム・ランドンから贈られた幼児用の背の高い椅子におさまって食卓を睥睨していた（この記憶に値する晩の写真が、まだどこかにあるだろう）。そのときぼくは、日本については大して知らなかった。行ったこともなく、知識はごく一般的なものに留まっており、何人かの偉大な映画監督たちの名前にはほぼ限られていた。小津、溝口、黒澤。しかも夕食の際、映画『生きる』に対する賛嘆の念を伝えたかったのだけれど（とりわけラストシーンで、主人公が夜、雪の積もったブランコに揺られながら歌を歌うところ）、いったいどの監督についての話なのか、わかってもらえずじまいだった（たしかに、ぼく流の発音では日本人の耳には奇妙に響いたことだろう。キュル＝オー＝ザ＝ウアー！）。

それからの年月、カン・ノザキはぼくにとって、日本での忠実な翻訳者というだけではなく、親しい友人、有能なガイド、そして講義にぼくを迎え入れ、講演会の司会を務める優れた教員となった。ぼくはカンが教壇に立ったすべてのキャンパスに招いてもらったのではないだろうか。夜、講演のあとで学生たちと連れ立って、大学近くの〈イザカヤ〉に生ビールを飲みに行ったことをいまでも懐かしく思い出す（日本語は話せないけれど、でも〈ナマ・ビール〉はどこでも通じる魔法の言葉だ）。ああ、それも前世紀の話となった！ いまやあまりに多くの思い出が、記憶のなかで入り混じってしまっている。2005 年には何日か東京に滞在し、渋谷駅から 2、3 駅のところにある東大駒場の〈ゲストハウス〉で過ごした。ヌーヴォー・ロマンについての討

論会で発表するためだった。数年後、今度は東大本郷キャンパスの宿泊施設〈サンジョウ・レジデンス・ホール〉に滞在した。ある夜、タクシーで戻ったとき、大学の正門が閉まっていた、レジデンスに戻るための入口がほかに見つからなかったので、キャンパスを囲む壁に沿って何百メートルも歩いたあげく、とうとう壁をよじ登った。真夜中、泥棒のように、どこかにある監視カメラに写ってしまうのではないかと恐れ、恥じ入りながら（翌日になって初めて、少し離れた場所に夜間も開いている別の門があったことに気がついた）。そういうわけで、いやはや、白状すると、これは自伝的エピソードなのである。ぼくはそれをもとにして自作の小説『USB キー』の一エピソードをこしらえさせた。さらに言えば、『USB キー』に登場するナカジマ教授という人物は、カン・ノザキをモデルにして自由に作り上げたものである。東京に到着した語り手を、ナカジマ教授が出迎え、本郷キャンパスの宿舎に案内し、その夜、夕食に招待して滞在中の日程を彼に示す。ぼくらの私生活を危うくしたり、国家機密を漏らしたりせずとも〔同作品の内容への暗示〕、それと似た場面を 2013 年秋、カン・ノザキとともに自分が実際に経験したのだと言うことができる。

午後遅く東京に到着した。東大の本郷キャンパスに着いたときには、もう夜になっていた。ナカジマ教授は〈サンジョウ・カンファレンス・ホール〉のレセプションホールで待っていた。ようこそと出迎え、大学の宿泊施設に予約してあった部屋に案内した。ぼくは部屋で手間取ることなく、トランクを置くとすぐに、大学のレストランで待っているナカジマ教授に合流した。そこでは 10 人ほどの教授たちがひっそりと夕食を取っていた。ナカジマ教授と再会できたことが嬉しかった。それまでに経てきた過酷な時間のあとで、彼の友情のこもった控えめな態度がいくばくかの慰めを与えてくれた。とても若い給仕長（実際にはこの大学の学生がバイトをしているのだと教授が教えてくれた）が注文を取りにきた。彼は生真面目な様子で、ラミネート加工をしたメニューを手に握ったペンで指し示しながら、詳細にわたる正確な説明をした。肉料理がメインの A メニューと魚料理がメインの B メニューのどちらかを選ばなければならない、われわれは二人とも魚料理を選んだ。ぼくは疲れて、気が張っていたが、ナカジマ教授の繊細で行き届いた歓迎が雰囲気のを和らげてくれた¹。

だが、カン・ノザキのぼくの著作に対する貢献は、もちろんそれだけではない。ヴィラ九条山のレジデントとして 1996 年、京都に長期滞在したとき、日本滞在記を書いてみたらどうかと彼に言われなかったなら、ぼくは『セル

¹ ジャン＝フィリップ・トゥーサン『USB キー』ミニユイ社、2019 年。

フポートレート（異国にて）』を書いたでしょうか？ それはカン・ノザキと文芸誌「すばる」の編集長ハセガワ氏が思いついた企画だった²。

そこで、京都で魅惑的な秋を過ごしたこの時期に、毎月、日本印象記を書き、それをカン・ノザキが翻訳したのである。一連の文章（「東京」「奈良」「京都」）は、のちに『セルフポートレート（異国にて）』としてまとめられ、ミニユイ社から刊行された。序文で説明しているとおり、それらの文章を書いたときにアジアに滞在していたことは、当然ながら旅行記の概念についての問いをぼくにうながした。そのときはまだ、それが自分にとって何を意味するのか、正確には理解できていなかったとしても、自分が何を避けたのかはすぐにわかった。それは通常、旅行記から人が期待するほぼすべて、つまり異国趣味、絵になるもの、教育的または教訓的なものである。文章の目指す方向をそんなふうに否定形で狙い定めると、ぼくは日本での日々の経験において、最も純粋な無意味、面白みがなく平凡な事柄を貪欲に探し始め、そこからわが文学の蜜を生み出そうとした。

南禅寺のひっそりとした背の高い松のあいだを散歩していたある日、遠くに灰色の瓦をのせた何かの仏塔が、石壁の上にそびえているのを目にして、あたりの静寂の内に迷いこみながら、ぼくはふと、自分が時間ととけあっているという感覚を得た。

あるいはまた、「京都に戻る」と題したメランコリックな文章のこんな一節。

三条大橋の手すりに肘をつき、胸元の圧迫感、そして動かしていないのかすかに震える指先を意識しながら（昨晚飲みすぎた）、鴨川の水が音もたてずに流れてゆくのを見おろしていた。曇った寂しい日で、ぼくは黒いニット帽で耳を隠していた。後ろでは、橋の歩行者専用道を人々が通りすぎ、透明な傘、青い傘、ベージュの傘が行き交っていた。炎をかたどった鋳鉄製の装飾ののった柱の傍らに立ち、冷たい雨にじっと打たれながらその不快を避けようともせず、むしろ逆に、雨に顔を突き出し、頬で雨粒が碎けるのを感じながら、過ぎ去った時のことを思い、その流れに涙の雨で彩りを添えられたなと思った。

² ここでハセガワ氏に追悼の念を捧げたい。カン・ノザキは2022年のメールで次のように彼の逝去を知らせてきた。「こちらからは悲報をお伝えしなければなりません。『すばる』の元編集長だったハセガワさんが昨年末に亡くなりました。彼はぼくと同年でした。病気のことは知りませんでした。われらが編集者の急逝に動転しています。ご冥福を祈りましょう。彼とともに仕事ができ、われわれは本当に幸福でした。」

驚嘆し、さらには魅惑されたという以上に、カン・ノザキと彼の素晴らしい国との出会いは、ぼくの人生において決定的な役割を演じた。それゆえ、2000年代の初め、マリーについての小説連作を書き始めたとき、第一作『愛しあう』の舞台を日本に設定しようと決めたのである。より正確には東京の新宿界隈だが、街の灯りがぼくを魅了したのだ。第三作の『マリーについての本当の話』でも日本を舞台として、成田空港の滑走路でサラブレッドが逃走する場面を書いた。そして連作の最終作にあたる『ヌード』でも、語り手が品川の〈コンテンポラリー・アート・スペース〉での、マリーの展覧会のヴェルニサージュを思い出す場面を入れた。日本が登場するそれらすべてのページを、ぼくはコルシカかオステンデの仕事机の前で激しく体験した。それらのページを書いているとき、たとえ肉体的には日本にいなかったとしても、頭の中で、精神的には日本にいた。エクリチュールをとおして、ぼくはそれらの場面を比類ない激しきで生きたのである。

もちろんぼくは、自作の日本語への翻訳に加わったことはない。日本語訳を受け取ったときも、うっとりページをめくったり、表紙カバーを愛でたりするばかりだ。カン・ノザキの翻訳は見事なものであるとわかっている、日本語が読める友人たちの何人かがそう保証してくれている。しかしおそらく、『ムッシュー』の翻訳に関しては、横から塩を振りかけたことがあったかもしれない——まあ、ほんの一粒でしかなかったのだが。それはこんな話だ。いまからずいぶん前、1990年代の初め、まだパリのサン＝セバスチャン通りに住んでいて、映画『ラ・セヴィヤヌ』の撮影の準備中だった、はるか昔のこと。ミニユイ社経由で、カン・ノザキの友人の女性からの肉筆の手紙を受け取った。「ケルリング」という語は何を意味するのかというのが手紙の内容で、カンからそれを尋ねられたものの、自分にも意味がわからないのだということだった。

ケルリングとは何か？ これはごくささやかで、しかも面倒、かつ的を射た、ぼくのとりわけ好きな種類の質問である。ベルギーのスネフにある翻訳家コレージュでは、そうした質問に答える機会が幾度もあった。2000年代初めから、これまでに6回か7回、お城の元厩舎という豪華な場所で、わが翻訳者たちと共同作業をする機会に恵まれた。そして2000年のスネフといえ、これはもう記念すべき年であり、この年にほかならぬカン・ノザキその人が、ぼくの著作を日本に翻訳紹介した功績により大臣の手から文学翻訳賞を受け

取ったのである。しかし褒賞や榮譽の話はそこまでにして、重要な点に戻ろう。つまり〈ケルリング〉という語の翻訳である。

問題の案件は以下のとおり、拙作『ムッシュー』の一文である。

カルツは、うちでアペリチフでもいかがですか、と提案し、おずおずと、お酒を一本冷やしてあるし、プチフルもいくらか用意しておきました、と言い足した。そしてすぐ、やや早まったと思ったのか、ボンス＝ロマノフ夫人に向かって、たいしたおもてなしはできないんですよ、と慌てて付け足した。ラスクにバターを塗って〈ケルリング〉のをせたり、ロールモップスの缶を開けたりしたくらいなんです。

1990年代初めには解決困難とも思われた謎が、今日ではインターネットでしかるべく検索すれば簡単に解決する。「ケルリングとはタラの卵を主成分とするスウェーデンの特産品で、ゆで卵または半熟卵と一緒にクラッカーの上にのせて食べる。ケルリングはヨード風味から甘い味に変化し、口の中にははっきりとした後味を残す。」いやはや、何と目覚ましい明確さ、何という細部の豊かさであることか！ 当時はもちろん、インターネットは存在しておらず、カン・ノザキの友人の女性に対するぼくの回答ははるかに簡単なものだった。さて、親愛なるマダム、とぼくは返事をした。ケルリングとは、魚卵を干したものです（たぶんボラの卵では、とぼくは付け加えたかもしれない。ブタルグ [ボラの卵から作る南フランス名産のからすみ] への謎めいたオマージュをこめて）。

しかし、ぼくの本を日本語に訳すことには、こんな単純でささやかな語彙上のしょっぱい謎よりも、もっと微妙で複雑な問題がつきまとうに違いない。それはカン・ノザキ自身が、ロラン・ドムーラン [リエージュ大学教授、詩人・作家] との対談で、ぼくの本の日本語訳において直面した大きな問題の一つとして語っている事柄である。

「Je」をどう訳すか。そう、一見簡単なことと思えます。もちろんこの単語の意味がわからないわけではありません。問題は、われわれ日本人の言葉には二種類の「je」が存在するということなのです（第三の、「おれ」というものもありますが、しかしこれはどちらかと言えば乱暴かつマッチョで、トゥーサン作品に使うのは問題外です）。というわけで「ぼく」と「わたし」があります。大雑把に言えば、「わたし」のほうが公式的で丁寧、大人という感じで、一方「ぼ

く」はよりくだけた、親しみやすい、若い感じになります。『浴室』のときには「ぼく」を選びました。それが高度に文学的な、練り上げられたテキストであることは承知の上です。若い読者たちの熱心な反応に鑑みて、それでよかったと思っています。『ためらい』や『テレビジョン』の時期にきて多少頭を悩ませたのは、語り手の髪が後退していくのにあわせて、ひょっとすると「ぼく」ではなく「わたし」を用いて、いまや語り手が成熟の年頃を迎えていることを示すべきではないかということでした。しかし結局は最初に決めたとおりにしました。今後もそれを変えることはないでしょう。声の一貫性を保つことが重要です。ジャン＝フィリップ・トゥーサンは日本ではいつまでも若いままでしょう。

さて、もしぼくが日本ではいつまでも若いままであるならば、ぼくよりもさらに若く、退職のときまで学生っぽい様子を保ったであろうカン・ノザキはいったいどうなのか？ というのも、年とともにカン・ノザキの知識や経験や教養はたえず増え続けたにせよ、はっきり認めなくてはならないのだが、彼が永遠の若者のような、あの軽やかな若手教員のシルエットを失うことは決してなかったのである。

(K・N 訳)